

説教余滴「塚本虎二・友よこれにて勝て」

塚本虎二は、福岡県出身、1885－1973 大正一昭和時代の聖書学者、キリスト教伝道者。

1885（明治18）年8月2日生まれ。東京帝大在学中から内村鑑三に師事、大学卒業後、農商務省に入り、かたわらギリシア語を学ぶ。1919（大正8）年、役人生活を捨て、伝道者となる。関東大震災（1923年9月）で妻を失った。1930（昭和5）年雑誌「聖書知識」を刊行。日曜日に東京丸の内集會をひらき、キリスト教無教会派の指導者として活動。1973（昭和48）年9月9日死去。88歳。著作に「イエス伝研究」「福音書異同一覧」、私訳『新約聖書』など。戦時中の愛国的姿勢に対し、戦後批判された。主宰された丸の内集會ではメンバーの一人、藤林益三氏は後に最高裁長官となる。

『友よ、これにて勝て』は、若い人たちに語った言葉を477、集めたもの。

1938（昭和13）年から1943（18）年頃語ったものだが、出版は昭和29年10月。

発行所は、伊藤節書房（文京区音羽町3-12、伊藤節男）、講談社の近くだと思う。

「罪の煩悶は信仰に入るまでは必要だけれども、いったん福音を信じた以上はすっかり忘れてしまわなければいけません。罪の記憶が少しでもある間は天国に入れないのですから。」146番

「刑の執行を猶予されている死刑囚だと思えば、感謝して受けることのできない運命はないはずだが。」215番

「キリストのようになろうという野心が、一番人間にふさわしい野心であろう。」272番

「祈れないのは祈らないのだ」339番

「人の好意は絶対だ。人が好意でくれたものなら、黙って、感謝をもって受け取らなくてはいけない。」384番

「あと百年生きると思って仕事をしたまえ。しかし今夜死ぬかもしれないと覚悟したまえ。きっと緊張した、しかもゆとりのある生活ができよう。」477番